深い学びのために

1 次の傍線部の助動詞の意味の違いを、それぞれ確認してみよう。

(1)　「見ゆる」「聞こゆる」などぞ言ふなる。（一〇八・9）

(2)　こは今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひなるを（一〇八・8～9）

学習のポイントの解答例

【答】 (1)推定　(2)断定

▼ポイント▲　助動詞「なり」は、伝聞・推定の助動詞ならば終止形に接続し、断定の助動詞ならば体言または連体形に接続するため、意味の違いは、まずは接続から確認するのが望ましい。ただし、(1)の「言ふ」のように、接続する対象の語が四段活用動詞の場合は終止形と連体形の区別がないので、前後の文脈などから判断する必要がある。ここでは、作者が土地の人から聞いた話から判断した内容であるので、推定と解釈する。(2)は、「言葉遣ひ」という名詞に接続しているので、断定の助動詞である。

2 次の部分を、傍線部の語に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1)　あまねく聞き集めなば（一〇八・5）

(2)　そをよきことと心得たるなめり。（一〇九・2～3）

1 本文では、「見える」「聞こえる」に対して、「見ゆる」「聞こゆる」のほうを「雅びたる言葉遣ひ」（一〇八・9）だと言っているが、その理由をまとめてみよう。

学習のポイントの解答例

【答】「見ゆる」「聞こゆる」は中古・中世文学などに頻繁に出てくる古語であるのに対して、「見える」「聞こえる」は宣長時代に使用されている言葉ではあるものの、古い文献には、見当たらないものだから。

▼ポイント▲　「見ゆる」「聞こゆる」について言及した箇所では文献に関して全く触れていないが、宣長は当然よく読んで知っていたであろうことは疑い得ない。「ひきがえる」の場合は肥後の国の人が話してはいるが、宣長も「万葉集」などの例を思い浮かべているのである。なお、下二段活用の動詞の下一段化は室町時代後期には現れ、江戸時代には、かなり一般的になっていた。

言葉と表現の解答例

【答】⑴広く聞き集めたならば　⑵それをよいことと心得たようだ。

▼ポイント▲　⑴の傍線部「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。さらに、「ば」に接続しているので、「未然形＋ば」の形であり、順接の仮定条件の訳となる。⑵の傍線部「な」は、断定の助動詞「なり」の連体形の撥音便化で、撥音無表記となっているもの。「めり」は推定の助動詞。「な」の直前の「たる」は完了の助動詞。

言語活動の解答例

1　**作者の、地方の言葉に対する感じ方・考え方についてどのように思うか、話し合ってみよう。**

【答】（省略）

▼ポイント▲　文化は先進地域から後進地域へという一般的な流れを考えて見るとよく理解できよう。日本の場合は、なんと言っても京都に文化の中心があり、江戸時代になってから、江戸・大阪も文化的に発展したが、ともかく人の密集する大都会である。地方にも、城下町があって、都市は形成されるが、文化は大都会から流れていき、大きな影響を受ける。ところが、地方でも人の往来のあまりない、先進文化との交流のない地域では、昔から伝えられている文化が残されているというわけである。現代における方言、あるいは民俗学なども紹介して、生徒に活発な意見を求めたい。同時に、言葉が古代から次第に変化していったということに着目して、現代語の言葉の乱れ（例えば、「知られる」とあるべきところを「知れる」とするような類）と関連させるのもおもしろい。

（小林　俊洋）